

まさに「雷鳴」——綴子大太鼓の轟きとどろ

八幡宮綴子神社例大祭

通称「大太鼓祭り」と呼ばれている八幡宮綴子神社の例大祭が7月14日と15日の2日間、同地区で行われ、直径3・80mの大太鼓をはじめ、3張りの大太鼓、また獅子踊りや奴踊りなどの郷土芸能が同神社に奉納されました。その様子をご紹介します



出陣行列

祭りの起源は七百年前

お祭りは、今から約七百年前の弘長2年(西暦1262年)ころから始まったと伝えられています。当時の綴子村は灌漑用水の不足に悩んでいました。そのため雨乞いの神事として天に届くような大きな音を轟かせる大きな太鼓が作られ、明治の末期にはすでに直径6尺(1・8m)ほどであったといわれています。

神社への奉納行事はかつて、上町・下町両集落が合同で行っていましたが、奉納の先陣争いを張りあい、けが人が出るほどでした。そのため昭和のはじめからは、両集落が一年交代で奉納することになり、今度は太鼓の大きさを競い合うようになりました。

昭和6年には上町の太鼓は直径2・16m、下町が2・10mでしたが、以後交互に新調、改造を行ない、現在では両集落とも直径が4m近い巨大なものになっています。

隔年で当番町が変わる奉納行事

今年の当番町は上町。上町の大太鼓は最も大きなものが直径3・80m、二番目に大きなものでも3・30mあります。また、奉納は出陣行列の形式で行われており、地区内の上町(うえまち)と下町(したまち)の2つの集落が徳川方と豊臣方に別れて1年交代で奉納を行います。本祭りの15日は、「ヤツバリ」といわれる棒



ツバリ」といわれる棒

術の使い手を先頭に100人あまりの出陣行列が集落内を午前11時過ぎに出発、3張りの大太鼓を打ち鳴らしながら綴子神社に向かい、地元の人たちや観光客が見守る境内で奉納行事を行いました。最近では、首都圏などからお祭りを見るため綴子を訪れる人たちも多く、初めて見る巨大な大太鼓に驚いた様子。太鼓を背景に記念撮影をする人など、盛んにシャッターを切っていました。



ひょうきんな「押への槍」

境内では獅子踊り・奴踊りなどを奉納

境内では、出陣一行を取り仕切る太夫の口上で始まり、勇壮な獅子踊りが奉納行事の口火を



奴踊りの采配役「中奴」

中太鼓を先頭に、3張りの大太鼓が集落内を行進。太鼓の奉納は雨乞いの神事。打ち鳴らす音を雷鳴に似せて、雨を降らせるために大きな太鼓が使われます。



続いて、子ども会女子による大太鼓音頭や男子7人による奴踊りがかわいらしさを観衆の目を引くと、トリを取った青年会の奴踊りが軽快な所作で幾つもの演目を鮮やかに決め、満場の拍手を受けていました。

ご託宣は「平年作以上」

また、奉納行事の前に神社境内で行われた作占い「湯立ての神事」では、今年の作況は「平年作以上」とのご託宣が出ています。

▼奴(やっこ)踊り



▲神社の隣の建物は、鎌倉時代に起源を持つ庶民教育施設・内館塾(文庫)の蔵書収蔵庫。綴子神社の武内家は古くから私塾を開いて付近の師弟を教育していました。塾で勉強に用いられた古文書などが現在も保管されています。



奴踊りは「中奴」を中心に円陣で行われます。上町の奴踊りの演目は、現在13種類ほどが伝承されており、このうち「朝日山」「通り奴」「扇奴」など7つから8つの演目が中奴の采配で演じられます。

綴子がかつて、旧羽州街道の要衝でした。津軽候の参勤交代、江戸幕府巡検の際には本陣が設置され、上町集落内にあるその跡は市の文化財に指定されています。